

もっと知りたい
ふるさと

①6 稲荷山四神について

はじめに、江戸時代も中期以降になると「お伊勢参り・善光寺参り」等一般庶民の信仰による旅人と共に物資の流通も盛んになって来た。

とくに善光寺街道の宿場でもある稲荷山は京・大阪・西国からの善光寺参りの旅人及び近在の物資の集散地として賑わった。享保十八年(七三三)京都祇園より商売繁盛・家内安全・疫病退散の守護神として厄神宮牛頭天王を勧請した。

さらに、天明五年(七八五)庶民の娯楽として牛頭天王祇園神輿を京都より迎えて稲荷山の祇園祭は盛大に行われる



ようになった。

この神輿は破損が甚だしく、文政八年(八二五)再調製したが、弘化四年(八四七)三月二十四日の善光寺地震により稲荷山はそのほとんどが倒壊。四カ所からの出火により、天王神輿も焼失してしまった。一八年后慶応元年に再調製された神輿が現在の牛頭天王神輿である。

さて、神輿と共に新規に四方を護る神としての四神と、農村部元町として水を司る俱利伽羅竜王(剣竜)が加えられた。

これが稲荷山祇園祭の四神である。この四神は水内郡妻科村(現長野市妻科)彫刻師山崎儀作により四拾両にて新調された。

四神は四方を護る神とされている。また四季をも表現している。

青竜(東方・春)春になると山川草木は二斉に青々と芽吹き季節になる。

朱雀(南方・夏)真っ赤な灼熱の太陽がかんかん照り続け、

草木も枯れるほどの暑さである。

白虎(西方・秋)太陽の日射しも柔らぎ、朝夕めつさり冷えてくる。早朝の野山は真白に霜で覆われる。

玄武(北方・冬)水の神で亀に蛇が巻きついた姿を現している。

剣竜(水を司る神・俱利伽羅竜王)不動明王の持物の剣に竜が巻きついた状態を表現している。

祇園祭は治田町・上八日町・本八日町・中町・荒町の順に当番町となり、天王神輿はお仮屋へ遷座される。

四神は剣竜と共に当番町の二カ所に安置される。

本祭りの当日は、あらかじめ定められた稲荷山全町の渡御順路を大神樂が露払いし、四神がそれに続き巡して、治田神社境内の輿庫に納められるが、天王神輿はその後渡御順路に関係無く時間の許す限り練り歩くことができる。

稲荷山 宮澤芳巳



白虎と玄武



朱雀



青竜

四神は現在蔵し館に展示されています。